

SA
Shi

柳宗悦宗教思想集成
「一」の探究

書肆心水

m

柳宗悦宗教思想集成 目次

宗教とその真理

序にかえて	13	凡例	17	第二版序	18
宗教的「無」	19				
「無為」に就て	26				
「中」に就て	30				
種々なる宗教的否定	38				
宗教的時間	76				
「無限」の意味に就て	86				
自我に就ての二三の反省	93				
規範と経験	99				
宗教的究竟語	102				
即如	115				
個人的宗教に就て	127				

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

宗教の理解

神祕道への弁明	135
哲学におけるテムペラメント	
哲学的至上要求としての實在	165 147
神に関する知識	187
序	210
存在の宗教的意味	212
浄き母マリア	219
神の愛	227
宗教詩「霊の暗夜」	232
神の問題	240
神の存在	255
全一なる神	263
神の理解	267
未来の宗教哲学に就て	273

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

神に就て

現代の宗教哲学に対する種々なる疑問	281
宗教的真理の本質	294
宗教の究竟性	305

亡き宗法に	322
-------	-----

序	324
---	-----

神に就て私の友に書き送れる書翰	
-----------------	--

第一信 神への懷疑に就て	327
--------------	-----

第二信 神への理解に就て	340
--------------	-----

第三信 神自らと彼の神秘に就て	355
-----------------	-----

第四信 神への信仰に就て	371
--------------	-----

第五信 神の現れに就て	383
-------------	-----

第六信 神と吾々との関係に就て	399
-----------------	-----

第七信 神の愛と救いとに就て	414
----------------	-----

凡例

一、本書は柳宗悦の宗教思想論の主著三篇『宗教とその真理』『宗教の理解』『神に就て』（三篇合計四百字詰原稿用紙換算約千二百枚分）をまとめたものである。『宗教とその真理』は一九一九年に叢文閣より刊行され、『宗教の理解』は一九二一年に叢文閣より刊行され、『神に就て』は一九二三年に大阪毎日新聞社・東京日日新聞社より刊行されたものである。本書の底本には筑摩書房版柳宗悦全集を使用し、左記の表記変更をおこなった。

一、新漢字、新仮名づかいで表記した。

一、送り仮名が現代の一般的な感覚では違和感が強いと考えられる場合は送り仮名を加減した。

一、読み仮名ルビを補った。原文にあるルビはすべてそのまま踏襲した。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。二の字点は「々」に置きかえて表記した。

一、本書刊行所による挿入註釈は「」で括って記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にある左記の語を平仮名表記に置きかえた（五十音順、送り仮名と活用語尾は代表例）。

愛蘭（アイルランド）、雖も（いえども）、聊か（いささか）、伊太利（イタリア）、愈々（いよいよ）、況んや（いわんや）、印度（インド）、埃及（エジプト）、於て（おいて）、於ける（おける）、和蘭（オランダ）、斯く（かく）、嘗て・曾て（かつて）、希臘（ギリシャ）、基督（キリスト）、茲（ここ）、悉く（ことごとく）、此（この）、是・之・此（これ、曩に・向に（さきに）、扱（さて）、宛ら（さながら）、併し・然し（しかし）、而して（しかして）、而も・然も（しかも）、屢々（しばしば）、西班牙（スペイン）、其（その）、抑も・抑々（そもそも）、夫れ（それ）、慥か（たしか）、啻に（ただに）、忽ち（たちまち）、独逸（ドイツ）、兎も角（ともかく）、乃至（ないし）、乍ら（ながら）、就中（なかんずく）、為す（なす）、可し（べし）、殆ど（ほとんど）、寔に（まことに）、間敷（まじき）、亦（また）、馬太（マタイ）、儘（まま）、寧ろ（むしろ）、若し（もし）、齋す（もたらす）、猶太（ユダヤ）、羅馬（ローマ）、纔か（わずか）

柳宗悦宗教思想集成

「二」の探究

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

宗教とその真理

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com



我孫子での四年の生活の思出に
この書を余の姉直枝子夫人に贈る

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序にかえて

知友に

長らく余が愛し企てた神秘道に関する著作が、完成される筈の期日は再び延引されて了った。未だにそれを上梓する喜びを得ないのを、約束した自分は心苦しく感じている。

しかし余の怠惰がこの企てを遅延させたとは思われたくない。久しく読書し思索した今日書くべき内容の系統は既に明らかにさえされている。しかし読書は読書を誘い反省は反省を追って、限りなく範囲も内容も広げられた。書かねばならぬ想ねばならぬ幾つかの事項をそのままにおくのは心残りである。かかる躊躇がその完成を長く遅滞させた。

只基督教に現われた神秘道に基く概説なら既に早く纏め得たものを、東洋の思想に近づいて以来かかる事をしてはならぬとさえ考えられた。余は深く恐ろしい思想に次ぎ次ぎに接した。

思索は思索を追って筆の運びは鈍ってきた。思索が時間を奪うにつれて、余の前に開かれた霊の世界は神秘の深さをいや増してきた。自分は驚異の念に充ちて様々な真理を身に味わおうと求めた。かくて幾分の味わいを得たと思うものを一つ一つに綴っていった。それ等の部分の集りから出来たものがこの一冊である。

この断片を組織ある本に代えて出すのは違約の罪を幾分か償いたい心によるのである。しかしここに集められた或るものは、後に余の本の或る章を形造ると思う。ともかく凡ては同じ心の発現故に、この一書も尚余の未来の企ての暗示になり得るかと望んでいる。しかし系統は無いにしても互いは互いを補遺して一つの云いたい心を云い現わすであろう。貧しい切れ切れのものではあるが、真理を求める心の現われが何事かを人の心に訴えたと信じている。

自分は真理の宗教に奉仕する一個の篤い信徒だ。公明な真理はいつか万民の共産にされねばならぬ。かつて宗教はことごとく排他の宗教であった。その真理は或る宗派に限られた所有であった。しかし真理が普遍であるならば、自他の間に挟まるこの障壁はいつか破られねばならぬ。余の努力は真理のうちに人々の愛を結ぼうとするのである。互いの理解に共有の宗教を産もうとするのである。これはいつか果されねばならぬ明確な要求である。人は久しい間東西の結合を夢みた。しかしこの理想

は先ず宗教的真理の上に安定されねばならぬ。理解は先ず愛を心とする信徒から出発すべき筈である。余はかかる要求のもとに種々な宗教の真理を尋ねたのである。

既定宗教徒からすれば余は異端者の一人であると云われるかも知れぬ。しかし名目は何れでもいい。余は真理への信徒であるのみで充分である。余は例えば基督教の存在が直ちに仏教の非認であるとは思わぬ。一宗の存在が只他宗の排斥によって保たれるのは醜い事実であらう。多くの宗教はそれぞれの色調において美しさがある。しかも彼等は矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであらうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである。余はこの美を描こうとしてこれ等いくつかの論篇を書いた。或る者は何れの宗教にも徹し得ない愚に終ると云うかも知れぬ。しかし何れかに限るのが道に徹する謂ではない。もし要求が二つの教を共に愛そうとするなら、それも真理への新しい道であらう。要求はいつも新しい真理の創造者であった。未来の宗教は深く個人の要求に基く宗教であらねばならぬ。余は二つの教えを矛盾なく理解し得る道があり得ると信じている。しかもかかる道を徹する事に未来の宗教が生れると信じている。余が異なる宗教の何れにも近づこうとするのは、その中位に止ろうとする為ではない。一つの新しい要求による道を徹したいが為だ。只在来の道を踏んで一宗に真理を限るこそ却って相対に終る不徹底な態度であらう。

真理そのものは不易である。しかしものの見方は日に日に新たであつていい。異った個性を経て滲み出るからにはその真理は異った香りをもたらす筈だ。真理を活々させるのは新しい要求の力だ。新しい真理とは新しく身に味わられた真理との謂であらう。

余の思想は長らく固定する苦しみを経た。しかし或る日俄然としてそれが打ち破られる自由を感じた。余の蒙を啓いたのは実に次の問答であつた。

「智閑禪師に僧問う、蓮華未だ水を出でざる時如何、師云く、蓮華。云く、水を出でて後如何、師云く、荷葉」（碧巖録第三十一則）。

感じ得た何ものが果して禅意に適うかを自分は知らない。（恐らくその密意は尚別個にあるのであらう）。しかしこの問答に接して以来余の思想は流るる如く新しい方向へむいた。余は不言の暗示をここに得て一つの見知らない世界に入った。余は様々な宗教的真理をとにかくこの得た鍵によって開いてみた。尚開かねばならぬ部分が無限に残されている感が切にする。もとより余はここに満足する者ではない。かかる見方へのみ没する時余の思想は再び凝固の苦しみを嘗めるであらう。余は早くかかる見方をも打ち破りたい気かられている。しかし感じ得た現在の真理は幾分かの価値を残して未来への準備を造るであ

ろう。これは或る見方から見たら、かくも考えらるるであらうとの心を伝えるに過ぎない。余は謙遜な心のうちにこれを一つの本に編んだのである。

各篇は独立の題材であるが、むしろ或る見方によって様々な問題に触れて見た結果、多少の重複がある事は免かれ得ない。しかしこれは単なる繰返しであるよりも、或る見方を徹する為の必要な結果であつた。むしろ余の見方がどれ程究竟の理解に堪え得るかの試練であつた。重複もかくして余の努力の証となるであらう。

さてここに集めたものはごく旧稿を別にして凡て或る宗教的真理を取扱つた論文である。宗教的真理とは究竟の真理と云う意味であつて、直ちに神又は実在を暗示する真理との謂である。従つて内容は「絶対値」を含むが故に或る仮定の上に立つ真理ではない。人は自然律の如きものを絶対的真理と呼ぶかも知れぬが、かかる科学的真理と余の云う宗教的真理とは別事であると分つてほしい。同じ信と呼んでも神を信ずるのと自然律を信ずるのとは全然別個の意味がある。宗教的真理は味わう事によつてのみ知らるるのである。直ちに体験が真理の如実な理解である。分別の理知は未分の真理の完き把握にはならぬ。絶対には既に差別の挿入を許さぬからである。これ等の論文は余自らが理知を越えて信念に活きたい為に書かれたのである。単な知識の提供が余の本旨ではないと知つて欲しい。

真に絶対なものは対辞を容れぬ。対辞を許さぬ内容は既にかくかくであると断ずる事は出来ぬ。論理の法則に基いて知識は「彼乎是乎」either の取捨に終る。知の差別を容れぬ内容はこれに反して「非彼非是」neither nor の無限の連続である。凡ての相対的断案が否定されて後現われる真理である。従つて絶対未分の表示である宗教的真理は自ら否定的表現に依托される。さもなくば象徴によつてこれを暗示するよりほかはない。宗教的否定が必然余の心を引いた問題である。一般に「否定」とは只消極の意味に終るものとして愛を受けないでいる。しかし積極も消極の対辞なら、人々の愛するその積極は尚相対的内容に過ぎぬ。真意は積極消極をも共に絶する、「非彼非是」の否定である。否定とは相対からの離脱である。故に肯定の対辞としての否定と云う意では決してない。

これ等の論文は直接間接神秘道の諸相を画いている。従つて余が信ずるこの道へ人々の注意を促すなら、余がこの一冊を出した趣旨も充たされるわけである。

諸友よ、余は今或る転期に近づいたのを心を感じている。これ等純に思索し得たものを一層切実な生活に活かす為に、余は余の生涯の方向を更える事を迫られている。これ等の思索は実にその準備であつた。

想えばこの書が街頭に出づる頃、余は満三十の新年を迎えるのである。歳三十は靈の歴史が記録する恐ろしい時期である。

余はこれ等の論文を省みて過去のものとは云え慚愧の至りに堪えぬ。余は謙讓な意を以てこの一冊を静かに神の御手に委ね、彼の審判を待とうと思う。

千九百十八年十二月一日

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

我孫子にて

柳 宗悦

凡例

これ等の論文はことごとく改鼠し増訂した。或るものはほとんど稿を改めて書いた。

これ等のうち「個人的宗教」、「自我に就ての二三の反省」、「宗教的時間」及び「聖貧」の四つは帝国文学に寄稿したものであつて、残りのものは凡て「白樺」から再録した。その内「規範と経験」は一部をかつて読売新聞に掲載した。最後の「神に関する知識」は、もと「神の本性に就て」と題してその大部分を大阪の雑誌「表現」に寄稿し、後追補して更に「白樺」に「神の理解」と題して再録したのである。これは元來講演の内容であつたものを、後に書いたのであるが、只序論に止つて完結しなかつたのである。しかしその部分が神に関する知識の問題を取扱つて一章をなしている故、右の如く更に改題してこの本に入れたのである。

「聖貧」は「種々なる宗教的否定」の一章として書くべきものを、別に離して先に書いた為、今その順次においてみて多少文脈が異つてゐるのは心残りである。

「無限の意味に就て」の一章は、もと「宗教的無限」と題して、その終りの一部に時間的無限をも取り扱つたのである。しかしこの部分を後に切り離して単独に「宗教的時間」の一章を書いた為、原文の凡てを再録するのは重複の恐れがある。故にその時間の部分を棄てて前半のみをここに入れたのである。従つて全体としては不備であるが、尚「宗教的時間」の一章の補遺になり得るかと思う。

これ等の論文の中にしばしば「即如」と云う新語がある。この語義に就ては「宗教的究竟語」の一章を読んでほしい。尚即如と神との両語が交互に用いられている個所があるが、後者は只一般の用語として通じ安い所にのみ多く用いたのである。一層嚴密な思索を要求する場合には主として即如の新語をこれに代えたのである。

口絵はジョットの筆になるアシジ上院の壁画の四つの象徴画の一枚、「聖フランチェスコと貧女との婚姻」を描いた画である（本篇扉に掲載）。「聖貧」の一章はこの絵に現われた主題の解説ともなるであらう。

この書の出版に関して有島武郎、足助素一両君の好意を受けた事を感謝したい。

SAVILE
ShoShinSu.com

第二版 序

この書が市に出てからまだ旬日を経ないのに、第二版の序文を書く様になった事を深く読者に感謝する。

この本に納められたものの内、一番古いのは、「哲学におけるテムペラメント」であって、数えれば五年半も前にかえる。想えばこの一篇は余の思想の出発であった。余は理知を越えた何ものか永遠なものを乞い求めて、それを哲学の根柢と見做した。哲学を永遠ならしめるものは純論理の力ではなく、特殊な個人的テムペラメントであると余は厚く信じた。従って余は哲学と芸術との親交に新たな美を甦らしたいと求めた。余の第二の論文「哲学的至上要求としての實在」はかかる心の産物であった。余はこれによって余の思索が新たな世界に入るのを覚えた。

かくて實在の問題は必然神の問題を招いた。如何にして何等の独断を加えず神の認識を得べきであるか、余は新たな自由な出発によって神の意味に接したい心にかられた。必然神の語に聯想される伝習の思想を拭い去らねばならぬ。余が「神」の字よりも「即如」の字を要したのもかかる要求の為であった。

理知によらず、独断によらず、自由な思想を求めた余にとって、自由宗教であった神秘道が如何ばかり厚く温く思われたかは自然であらう。余は先ず基督教に現われた神秘道に関する著書及び神秘の文学を少からず耽読した。しかし神秘の古郷である東洋の思想に帰らねばならぬ必要はまもなく迫った。余は多くの異常な思想に触れて、尽きない思索の圈内に入った。余は即如を理解する道を求めた。何人も神秘を味かう事において経験する所謂「否定道」が、又余の最初に通過せねばならぬ道であった。余は否定の道を尋ね歩いた。この本に納めた始めの部分の論文はこの旅の記録であり、余の思想の足跡であった。

余は又新たな道を辿り始めた、しかしこの事は次の著書が物語るであらう。余の心の旅のこの短い叙述も、読者にとって何等かの意味があるかと思つて、これ等の言葉をここに添えた。

この第二版においては多くの誤植を訂正した。重ね重ね校正の労をとってくれた橋本基君に深く感謝する。

一九一九年三月十五日

著者

宗教的「無」

「趙州和尚に僧問う、狗子に還って仏性有りやまた無しや。州云く、無」。(無門関第一則)

かつては生れながらに親しみがあつたこの思想も、今は西欧の文化に育つ凡ての思索者によつて、卑下せられ非難せられ、直ちにこれが東洋宗教の拭い得ない欠損であると迄評されている。不幸にも吾々固有の宗教、特に仏教又は道教の如きは、その教理が消極的否定的と云う故を以て、今はその故郷にすら愛される悦びを得ないでいる。それが宗教的真諦として人々の心に覚醒を促した日は既に過ぎ去つたと迄云われている。再び「無」を説く者があるなら、彼は只亡びゆく昔に戻る者とさえ思われるであらう。この著しい宗教的冥想も今は只歴史に現われた思想としてのみ反省される。研究を旨とする学者はその周囲に集つてはくる。しかしそれが犯し得ない真理として又宗教として彼等に活きているのではない。正当な理解が彼等の批判から、いわんや一般の非難から求め得られようとは期し難い。目して鮮明な欠陥とする所を、余が捕えて強く弁護しようとするのは一見奇異な企てと思われるかも知れぬ。しかし問題は吾々には特殊の愛着がある。丁度人々が生い立ちの故郷を慕う様に、この問題に戻る時吾々には心の故郷に帰る想いがある。そこには今も尚神秘的な思想の泉が湧いている。泉は幾千年を流れている。しかし湧き上る水は日に日に新しい。真理はいつも時間を越える。只吾々の優秀な祖先が感じぬいていたその真理が、今弁明の形で保たれようとするのはむしろ寂しい事実である。吾々の任務は凡ての外来の教養を容れて、しかも賦与された固有の使命を果すにある。吾々はいつか吾々自身に帰つてそこに真理を安定させねばならぬ。

この「無」の真理こそ特に東洋の色彩に鮮かである。しかもその宗教の様々な脈絡はこの頂きを中心集つている。これに達する時吾々は一般の予期を越えて宗教的思想の至極にたゞさわるのである。出来得るなら活々とこの「無」の内容を捕え得たい。捕え得たものを暗示し得たら、それが宗教的真理として人の心を引きつける力があると信じている。

心はおのずから無限を求める。これは私の行いではない。何ものか抑え得ない力が心にかく迫るのである。宗教心とはこの無限への憧憬であり帰依である。凡て信仰の感激はこの無限に交る刹那の体験である。宗教は密に絶対を抱く。絶対の直指にこそ宗教がある。

吾々は省みてこの無限の深さを想う。この時心に読まれる至上の真理がある。かかる真理は直ちに無限なものの暗示である。言葉がこれを伝え得るなら、その言葉には絶対の意を含めねばならぬ。凡て宗教的真理と云われるものは必ず絶対の諦を伝えねばならぬ。絶対の性を失う時、真理は既に宗教の域を離れるのである。かかる要求によって示すべき絶対の相を、吾等の祖先は「無」或いは「空」と呼んだ。もとよりその意は絶対と同義である。絶対の意を離れては理解し得ぬ言葉であると知らねばならぬ。如何にして彼等がかかる文字を愛したか。「無」とは宗教的に如何なる意を含むのであるか。これ等の問いに以下の数葉は答えるであらう。

言葉は畢竟何事を定義する。定義は一個の局限である。何事を断じる時、吾々は或る特殊の性質をそこに固定する。或る色を緑であると呼ぶ時共にそれを赤であると呼ぶ事は出来ぬ。さてあらゆる断定が一個の限界を示すならそれは如何にして無限の表示たり得るであらうか。論理の規矩が思惟を支配する間かかることは既に許されていない。法則によれば論理は肯定否定の二律を予想し、その断案は何れかの取捨に終らねばならぬ。答えはいつも「然」か或いは「否」かを要求する。論理は徹底して矛盾を排斥する。「然」であり同時に「否」と云うが如きはそれ自身背理である。故に「然」を選ぶ時「否」は棄てられねばならぬ。一方が真である場合他方は必ず偽である。両者同時に真であり又偽である事は出来ぬ。有はいつも有であつて同時に無を意味する事は出来ぬ。善なる字が同時に惡なる意を兼ね含む事は許されない。

さてこれ等の法則から如何なる性質を帰納し得るであらうか。先ず選ばれた或る肯定即ち「然」は必ずその否定「否」の対辭 Antithesis である。「然」は「否」に対しての「然」である。両者は必ず相対的關係に成立する。しかも矛盾律及び排中律が示す様に、両者を同時に肯定もしくは否定し得ない故に、必ず「然」を選ぶ時は「否」は棄てられねばならぬ。両者は反撥し矛盾して決して同一たる事は出来ぬ。その何れにも属せぬ調和と云うが如きものはもとより是認し得ないのである。

さて言葉が一個の限定であり、示された内容が相対であり、しかも必然一方の排斥に終るなら、如何にして無限であり絶対

であり調和である至上の真理を示し得るであろうか。事実によればかかる企ては全く不可能である。あらゆる反律を包含ししかも二元を離脱する絶対は言語のよく尽し得る所ではない。如何ばかり高遠な字句も畢竟相對の意に止まるのである。相對的字義を以て絶対的内容を披瀝しようとする企てはそれ自身矛盾である。吾々は字義の持つ有限な範圍に就いて明晰な理解を持たねばならぬ。

凡ての深い體驗者は如何なる言語の表明よりも、内心直下の事実が一層切実であり自由であることを知りぬいていた。言語によつて完全に絶対の面目を伝えようとする望みは棄てねばならぬ。如何なる字句も單に複写に止る相對的内容の指示に過ぎぬ。字義は束縛であるが絶対は自由である。真に美わしい自然に対して吾々はいつても叙景の貧しさを知っている。何事にまれ真を画がこうとする時人はその筆の短いのを憾むのである。

宗教はいつても言葉を越える。人々は神を「至善」と呼ぶであろうか、又この言葉が永遠の真理を伝えると思うであろうか。しかし「至善」は「より善」又は「善」への單な比較に終る。いわんや只「惡」への對辭に過ぎぬ。「大」は單に「小」の否定に過ぎなく、「有」もまた「無」の對立である。善惡大小の區別すら容れぬ眞の神性が、かかる言葉によつて表明し得られたと誰が云い切るであらう。所詮絶対の内容は字義を越える。言葉によつて表明し得るものは尚皮淺な内容に過ぎぬ。そこには何の自由もなく開放もない。宗教は言語を容れぬ。凡ての言葉は不足である。あらゆる断定はそれが肯定にしる否定にしるむしろ神の名を汚すに過ぎぬ。凡ての言葉は中止されねばならぬ。神は「至善」であると云うよりも「善ならず又惡ならず」とこそ云われねばならぬ。共に「否」にも非ず「然」にも非ざる論理的矛盾こそ却つて無限なものの暗示である。強いて究竟なるものを説こうとするなら一切の断案はことごとく否定されねばならぬ。これが宗教的思索者の選んだ所謂「否定道」*via Negativa*である。

ここに否定とはもとより單な肯定の對辭ではない。肯定否定を共に否定し去る否定である。知的理解に基く宗教的思想がその究竟においてこの否定道を選んだのは必然の結果と云わねばならぬ。絶対なものはいつても非ず彼にも非ず、又その中位にも非ず同一にも非ず、一切のものに非ざる一物である。一切の言葉を越える内容に対しては所詮凡ての言葉を否定し去らねばならぬ。これが否定道の必然な理由である。

大珠慧海の「頓悟入道要門論」に

「善惡、有無、内外、中間に住せず、空に住せずまた不空にも住せず、定に住せずまた不定にも住せず。即ちこれ一切の処に住せず、只この一切の処に住せざる、即ちこれ住処なり。かくの如きを得る者を、即ち無住心と名づく、無住心とは仏心なり」

宗教
の
理
解

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

この書は私の前著「宗教とその真理」の後に、又私の来るべき著書「宗教の世界」の前に置かるべき性質をおびる。それ故前者からの発展であり、後者への準備である。

ここに納めたものは前の著述と同じ様に、宗教の諸問題に就て、時折に書いた断片の集輯である。最初から一巻の著書として書いたものではないが故に、云おうとする主旨に多少の反復があるのは免れないであろう。今度上梓するに際して凡てに筆を加えた。この書は私が三年前「宗教とその真理」を著わして以来、私の思索が何を摸索し、又如何なる過程を経て進んだかを物語るであろう。ことごとくが未だ途上にあるのを私は知っている。しかし多くの者も私と共に順礼の半ばに在るし、又更に多くの者はその門出に在るであろう。それ故これ等の断片的思想も或る人々には補佐ともなり又鼓舞ともなるであろう。吾々は互いに求め互いに語り合い互いを助けて、神の都へと一步一步確かな足を運んでゆかねばならぬ。

この本は自から三篇に分れ、又各々四個ずつの断片によつて一つの思想を現わしている。第一は神の愛と吾々の存在との關係に就て、第二は神の存在とその理解とに就て、第三は宗教哲学の諸問題に就てである。

書き方からすれば、私は第一編にある様なものを好む。しかしそれは芸術的発作が私に多量に來ない場合は書けない。しかもこれ等のものは自から断片的性質に終る。マリアの一章に読者は多少私の女性に対する考えを読むであろう。

私の頭を最も痛めたのは第二篇の神の問題を取扱った部分である。しかもこの至難な問題への僅かな暗示を与え得るに過ぎない。或る解決の閃きが私に強く感じられたものを綴つたまでである。如何にして考えられない神を考えるべきかと云う大きな矛盾に立つて、遂に考えるを許さないその事が、究竟なものの存在の自証となつてゐる事を感じたのである。

第三篇は特に未熟である。だが来るべき宗教哲学を異つた地盤の上に建設しようとする私の努力である。試みに過ぎぬのを知つてはいるが、しかし私は試みを試みる勇氣を持たねばならぬ。その中の最後に納めた「宗教の究竟性」は恐らく私が今迄書いたものの中で、最も簡潔に私の思想を綜合した一篇であつて、来るべき私の著書の基礎である。私はこの一篇を自分では最も愛している。

この著書の刊行に續いて、前述の様に「宗教の世界」と題した一書を出すであろう。これによつて私は今迄の思想を綜合し、且つそれを多少なりとも組織立て、来るべき宗教哲学の序説ともしたいと志している。さきにも書いた様にその本の準備としてこの書を手にせられる事を望んでゐる。

千九百二十二年秋九月、朝鮮に旅立つに際して

追伸

この書を編するに当って、或る章の清書は服部清子姉の労によった。校正の折私は朝鮮に居た為、その煩雑な仕事の凡ては足助素一兄、能勢道子姉及び私の妻の労に負うた。ここに厚い感謝の心をお伝えする。

柳 宗悦

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

存在の宗教的意味

千九百二十年八月三十日朝記す。

昨夜、余の心に次の様な考が浮ぶ事によって、余はその眠られぬ一夜を、楽しく過す事が出来た。

一

余は外なる存在とその内なる意味との関係を、宗教的に内省 (Introversy) する事によって、次の考えに導かれている事を、ここに書こうと思う。

或る真理が宗教的と云われるのは、如何なる性質に依るのであるか。

余は或る真理が宗教的に深く且つ確実であるとは、それが神に就ての精密な知識に合するが故ではなく、全く神によって保証せられた真理なるが故であると思う。充分な人知が神を審く時に与えられるのではなく、却って神によって人知が守られる時、真理が宗教的性質をおびるのである。故にかかる真理の確実性は人知の後に現われるのではなく、実に人知を許さぬ人知以前なるが故であらうと思う。

或る真理に神の保証を待つと云うが如きは、如何にも空漠な考の様に思われるかも知れぬ。しかし真理が絶対値を含む場合、即ち宗教的と云われる為には、何かそこに究竟的基礎がなければならぬ。神の保証とは絶対的保証と云う意味ではないか、神をおいてそれ自らを保証するものを、他に求める事は出来ぬ。「吾が」証明と云うが如きものは相対的内容に過ぎぬ。神に支えられずして、あり得る宗教的真理はないと思う。真理を指して絶対であると云い得るのは、只それが神によって保持される真理だからである。宗教的真理は余の所産でもなく余の所有でもない。神が所有する真理である。確実な余の知識が保持する真理ではない。すべて宗教のことに就ては、「吾れ」とか「吾がもの」とか云う言葉を謹まねばならぬ。

ここに宗教的真理とは、科学的真理の如きものを云うのではない。凡て實在性を表示する究竟な真理と云う意味である。一としての真理である。一とはもとより数理の一ではなく、宗教的一である。かかる一は凡ての分別に余り、これを対象となし

得ない自律の内容である。かかる一が人知によって明らかにさるるを待たぬとは、既にそれ自身が自明な一であるからである。かかるものが真理たるのは吾々の知識の保証によるからではなく、それ自身がそれ自身を保証するからである。云い換えればそれは神に保証せられた絶対な真理である。吾々にかかる究竟的基礎を神の他に求める事は出来ぬ。自証の真理を宗教的真理と云うのである。ここに神に支えらるるとは真理の外に神があると云う意味ではあらぬ。真理そのものが直ちに神の現われであると云う意味である。それ故宗教的真理に活きるとは神に活きるとの意味がある。

かかる真理は自証なるが故に、吾々の概念によって立証し得る何ものでもあらぬ。それはいつも思惟以前の理解を喚求する。宗教が感情に温まり、直観に深く訴えるのはかかる故であろう。宗教的真理はいつもそれ自身の真理である。Truth-itself 即ち「真如」である。自明自証の真理である。疑いを許さぬ真理である。信じるほかはない真理である。宗教が信仰を招くとはかかる意味があるからではないか。余は信ぜねばならぬ真理は知り得る真理よりも、より確実であると思う。理知によって信仰の位を漬してはならぬ。信仰の世界を只夢みる様な想像の世界だと思うであろうか、否、信仰の世界よりも、より具像な世界を吾々は持つ事は出来ぬ。自明な世界より、より明らかな世界を何処に持つ事が出来よう。疑い得ない神より、より疑い得ないものを何処に捕え得よう。余に如何に豊かな空想があつても、神の深さと確かさと又その明るさとを越えるものを、空想する事は出来ぬ。見えない神を見える物質より、より具体的であると云い得ない者は、宗教の真理を味わう事は出来ぬ。

しばしば宗教的真理は理知によって弁護され又侮蔑される。しかし理知によって完全に守護され又否定され得る宗教的真理は何処にもないであろう。それは常に自律自証である。それは審かれ得る何ものでもあらぬ。自らにおいて具足する自律の真理である。一瞬の踏らいをだに許さぬ自明な真理である。それは最初から犯し得ない真理との謂ではないか。かかるものは凡て神聖である。思議し得る内容ではあらぬ。かかる真理は權威を以て余が心に臨むのである。それは「信ぜんとする意志」を余に招いている。信ぜざるを得ない力である。それは余に一身を献げ一命を委ねる事を求めている。いささかの狐疑も躊躇も神国においては致命の傷であろう。イエスは試みる心をきらった。試み得る真理であるならば、それは宗教的真理ではあらぬ。「見ずして信ずる者は幸福である」とイエスは鋭く云い切った。見えない内容が見得る形よりも遙かに明るく見える時、神が心に降るのである。究竟な当体はいつも思惟を越え見分を超え得る。それは吾々の論理が肯定し得る何ものでもなく、又否定し得る何ものでもない。それはそれ自身において「洞然として明白である」。人知にとっては暗黒であろう。しかし信ずるものにとって、それは「赫々たる暗黒」と呼ばれている。

神の保証による真理を何の権利を以て疑うのであるか。疑うを許さぬ究竟な内容をこそ、絶対的真理と云うのではないか。

宗教的真理は実に思惟の対象とはならぬ。対象化し得る何ごとかは相対の内容に過ぎぬ。宗教的真理の前に凡ての思議は無益である。古人は「虚明自然なり、心力を勞せざれよ」と戒めている。

しかし「神の保証」と云う様な言葉は、神に信じ入らぬ者には最初から意味を持たぬかも知れぬ。かかる場合には思索によって「それ自身の世界」と云う事を内省するより他ないであらう。真に自明な自証な内容に迄吾々の心がよく徹するなら、その時突如、かつて見慣れない世界が彼の前に開展するにちがいない。しかし自律とか自明とかは最初から思惟に余り経験に現われない無内容の裏書きに過ぎぬと云うかも知れぬ。しかし真に思惟が尽きる所が悟道の関門である。思惟に余り経験に現われぬ境にこそ、却って真理の究竟性が依存するのである。人は経験に現われないものを無内容であると云い過ぎてはならぬ。経験以前の世界が、即ち先験の境が真に未だ何ものも分れない「一」の境である。真理が宗教的に確實であるとは、経験の後に在るからではなく、経験の前に自在するからである。人はかかる事が思惟し得ない故に無であると評するであらうか。しかしかかる「無」が却って究竟な真理の当体であるのを如何にしよう。よく古人も云った様に、

「よし汝の慧知がこの無に就て思惟し得ないとも、それを顧慮してはならぬ。余は実にかかるものをより愛するのである。思惟し得ない何事かはそれ自身に価値がある。」(The Cloud of Unknowing ch. 68)

余はよく思議し得るものに信仰を托してはならぬ。思惟を許さぬ境に神が在るのである。「景德伝灯録」第十四卷、葉山惟儼禪師の章に次の様な問答がある。

「師座する次で、僧有り問う、兀々地に什麼いずれをか思量せん。師曰く箇この不思量底を思量せよ。僧曰く、不思量底を如何か思量せん。師曰く、非思量。」

真に思量を絶し、「非思量」の境に入る時、却って彼に見得る真理があるのである。經にもこの事を細かに説いてある。

「文殊利菩薩の言く、世尊、非思量の境界はこれ仏境界なり。何を以ての故に、非思量の境界中に文字有ること無し、文字無きが故に弁説する所無し、弁説する所無きが故に諸もろの言論を絶す、諸の言論を絶する者、これ仏境界なり。」(文殊師利所説不思議仏境界經)。

神は思量し得る何ものでもないが故に無である。実にこの無に住する心が仏心である。この分別し得ない自明の境は、真に心の帰依を招いている。これは絶対の境であるが故に、只信じる事によってのみ味わられるのである。しかしこれは盲目的信仰ではあらぬ。信仰によって吾々は目的それ自身に融合するのである。目的から離れた信仰と云うが如きは、それ自身自家撞着な考想に過ぎぬ。信仰の生活において程吾々は確實な生活を営み得る事は出来ぬ。「無」に帰るその刹那において程、真に

「有」を捕え得る場合は何処にもあらぬ。

二

かかる神の境に凡ての根柢があり目的が内在する。あることが永遠であり不動であるとは、それが自律する内容に基礎をおくからであろう。如何なるものも神の保証を待つてのみ絶対たり得るのである。吾が生命が宗教的たり得るのは、その生命が神国に故郷を持つからであろう。余の存在は余から出たのではない。余は余を吾がものと云う事は出来ぬ。余の許された存在は、神の認許による時のみである。神の保証を待たずしては、何ものも真の存在を得る事は出来ぬ。見ゆる存在は見えない神に依存するのである。外は内に保証せられてのみ、外なる存在を得るのである。認め得ない世界によって、認め得る世界が支持されるのである。非思量の刹那において真の思量があるのである。「我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり」とイエスは云った。有が有の母ではない。無が有の真の母である。老子も云った様に「無名が天地の始」である。

実に或るものが事実として存在するのは、その内に含まれる意味に保持せられるが故であると思う。内なる意味なくして、あり得る外なる存在を想う事は出来ぬ。しかし一般には存在が意味を持ち来すのであると云われている。それはしかし本末の顛倒であろう。存在は存在によって現われるのではない。何ものか不動の基礎があつて、許し得る存在が現われるのである。存在は後である。意味が先である。「神に象どられ」る事によって、余が造られたのである。余の存在する事によって、神の存在を想い得るのではない。神が存在する事によって余の存在を想い得るのである。神の存在を想わずして有り得る余の存在はあらぬ。余は余の力で神を知る事は出来ぬ。余が神を想うのも神の力によるのである。神が余をして神に引きつけるが故に余は神を愛し得るのである。プロティヌスがよく譬えた様に、太陽の光なくしては太陽を見る事は出来ぬ。

人は肉体があつて精神がある如く見做している。よしこれが常識に又科学的見方に適うとしても、この事は精神の表現が肉体を要すると云う迄であつて、肉体が精神よりも先在すると云う意にはならぬ。余は却つて肉体こそ精神に要求せられた肉体であると思う。意味があつて存在が喚求されるのである。意味にこそ存在が依拠するのである。外が内を創るのではない。却つて内によって保たれる時、外があり得るのである。余の心の故郷は創造以前に在る。創造によって余の心が生じたのではない。ヨハネによればイエスはかく云つたと云う。「まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり」と。彼は又神に祈つて云う。「父よ、まだ世のあらぬ前にわが汝と僧にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え」。又他の個所に「世の創の^{はじめ}前より我を愛し給ひしにより」と云う句が見える。ヤコブ・ベーメが「未だ何ものも創られない境」

神
に
就
て

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

亡き宗法に

神に関するこの小さな本を、今神の御許にいる吾が子に贈る。短かかりしお前の一生を、この書において記念する事は、お前の父のせめてもの希いである。

お前が生れたのは去年の暮の二十一日の晩であった。月足らずで生れたお前は、弱い躰をもつて小さな床に横たえられた。寒い折であつたから、お前の体温を冷すまいと様々に心を尽した。しかしお前の唇はお前の命をつなぐ乳房を吸う力がなかった。止むなく搾つては匙でお前の口に少しづつ注いだ。泣く度は少なく又その声には勢いがなかった。私達は早くもお前の小さな顔に痙攣が来たのに氣附いた。医者は度々私達に呼ばれた。だが、それは二十四日の晩おそくであつた、僅か三日の命で、お前は苦しみを小さな胸に残し果なくもお前の父母から去つていった。生前のお前の顔を見た人も僅か十の指で数えられる。吾々身内のものと、その他には私の二人の女の友とだけであつた。凡ての時は余りに早く流れた。私達はお前の生や死が何を意味すべきかを想ひ感つた。死にし罪は凡て吾々が負うべきものであると考えられて、吾々はお前にすまない氣がしている。お前のお母さんはお前を抱きしめて泣き悲しんだ。生前お前に子守唄すら聞かせて上げる折がなかったからと云つて、棺にお前を納める時、シューベルトの曲を書き写してお前の胸の中に入れておいた。私がその紙きれを開いて見た時、終りの方に「これを神様に唱つてお頂きなさい」と記してあつた。お前の二人の小さな兄さん達も同じ唄で幾年かの宵を過ごしてきたのだ。

お前には生前名をつける暇すらなかった。死んだ折その室の床に「妙法蓮華經」と題した軸が掛けてあつたから、その中から一字をとつて宗法と名づけた。神もこの名を嘉し給い又お前もこの名を悦んでくれる事を望んでいる。法名は清心院宗法水子と呼ばれた。お前の亡き骸は青山にある私の姉姉達の墓に列べて葬られた。

お前のお母さんは、お前が私に非常に似ていたと幾度か云っている。私にもそう思えて嬉しい氣がする。いつか又お前に逢う折が来るのである。その日までの絶えない私からの便りのしるしとしてこの本をお前に届ける。お前はもうこの世においてはこの本を読む事は出来ない。だけれどもお前はここに書かれた数々の真理を、神様からもっと深くもっと温い言葉でじかに聞いているにちがいない。そう思つてこの本も、既にお前にとつて親しみ深いものである様に感じている。神の御許にいるお前が神に関するこの本を受けてくれるなら、私もこの上なく嬉しい。

神様の膝の上で遊んでいてくれ。そこから遠くに離れてくれるな。そこよりも安全な場所はない。そうして私が私の仕事を

終えて、お前の所に行く日が来るのを待っていてくれ。
千九百二十三年二月十六日
お前のお母さんも同じ様に云っている。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

若
き

父

よ
り

序

私はこの小著において、今迄に得た私の宗教的思想をもう一度顧み、その中心をなす神の問題のみを選んできて、与えられた理解を有機的順序に編もうとしたのである。

私は筆を執るに当って学的な正しさを保留しようとはしたが、それに止まらず出来るだけ叙述に親しさを欠かない様にと希つたのである。もしもこの単純な書翰体の書き現わしによつて、私と読者との心を互いに近づける事が出来るなら、私にとってはこの上なく幸いである。しかし書き慣れない文体の為に、却つて真意を傷つける所が多かつた様にも感じている。

如何なる著者も彼の神に関する思想を、躊躇なくして読者に送る事は出来ない。だが同時に凡ての読者が、心において最も求めているのはこの問題への答えである。吾々の凡ての思想は直接間接この問題に干与するとも云い得よう。神に就て書かれた本は既に甚だ多い。凡ての宗教書はこの問題から遠ざかる事が出来ない。然るに私がこの著書を更に加えるのは、私に与えられた理解が少からず今の人々のそれと異っているのを見出したからである。異ると云つても、それが独創の凡てであるからではない。私は過去の偉大な思索者、特に神秘思想家と名附けられる一群の人々に負う所が甚だ多い。

省ると近代における神の思想は、ほとんど皆私達の一個の立場から、又は所属する宗派の主張から説かれた神観に過ぎない。これ等の見方も特殊な意味においてそれぞれに価値がある。特にそれが深い体験を経由している場合には、それが誤つた云い方において現わされているにしろ、大きな価値がある。しかし私は神に関する思想を、私達の立場から構成するのを止めて、神の立場に帰つて神を見ようと欲した。

「神が神を見たらどうであらう。私が見る神と神が見る神とは違う筈だ。そうして前者よりも後者の方が一層本質的だ。神に歸つて神から神を見なければならぬ。これが最も基礎的な理解を私に与える」。

或る日突如としてこの単純な考想に入つた時、私の思想は実に流れる様に急速な転換を受けた。私は今もその折の経験を忘れる事が出来ない。

私は最初「究竟なもの」を理解する為には、厳密に相対的理解を越えなければならないのを感じ、その根本的出発を得る為

に、所謂「否定道」や「空観」をとって進み、私の思想からあらゆる二元的痕跡を拭おうと欲した。一度「不」によって洗滌されていない凡ての思想は相對であり独断である。そうしてこれが実に私にとって新しい一転換を準備してくれた。カーライルの言葉を借りれば「永遠の否定」『The Everlasting Nay』は「永遠の肯定」『The Everlasting Yea』に入る門であった。私の立場を放棄すると云う事は、神の立場に帰る事であった。神を私達の意識の中に求めざるべきでないと言う事は、神の意識の中に神を求むべきだと云う事を私に要求した。私の思想の否定において解された神は、神の思想の肯定において解される神でなければならぬ。私を棄てると云う事は神に活けると云う事である。私を離れるのは神に帰るのである。神に帰らずしては、神に関して肯定される思想はない。否定の道において凡てを浄めようとした私には、既にここに到達すべき準備が幸いにも用意せられてあった。私の神観は一転した。私はそれに伴う驚愕や喜悅を幾分なりこの著述において現わす事が出来たかと思う。

古きディオニシウス・アレオパジテの言葉を当て嵌めれば、私は「肯定神学」から「否定神学」に進み、更に「神秘神学」へ入ったのである。私の見る所によれば、多くの神観は肯定神学に尚止っている所が甚だ多い。しかし眞の肯定は否定を経由する事なくしては現われてこない。そうしてかかる否定は、より高き肯定へと私達を進ませてくれる。しかし私達にかかる最後の肯定を、もはや「世の智慧」をもって語る事は出来ない。パウロが云った様に「神秘」において、「隠れたる智慧」において語らねばならぬ。私は神秘神学に深い意義を見出している。

神への理解はその発足において決定される。如何なる第一歩を踏むべきかが常に重要である。そうして神に到る為に、何れの道を選ぶかを私は注意しなければならない。門出におけるかかる注意は、いつも順礼の足を守ってくれる。かくして私は歩みゆく旅路において眼に触れる幾多の光景を記しておかねばならぬ。又かつてそこを過ぎ去った者が、残していつてくれた道しるべの文字を読んでゆかねばならぬ。ここに書き記すものは順礼の途上に今尚歩みつつある者が、故郷の友に送る幾つかの書翰である。

それは決して私の本旨ではなかったが、宗教への誤認に対する幾多の弁明と説明とにおいて、これ等の便りを書き起す事は私は余義なくされた。私はともかく宗教に疎遠な想いを抱く人々の為に、この書を準備しなければならないからだ。しかし弁明に費される言葉は常に煩雑であつて潤いを持たない。信仰を知る人々にとって、如何にそれが無用な迂遠なものであるかを私は熟知している。それ故私は読者がこの書の半ば頃に来る迄、それを耐え忍んで終りまで読み続けられる事を切に望む。終りに近づくに従つて、私はその好意ある忍耐に向つて、きつと何ものかを酬ゆる事が出来るであらう。よし私の筆がそれを美しき装いにおいて贈る事が出来ないにしても、語られた真理の秘義は、読者に何ものかを暗示するであらうと思う。私はそ

の望みにおいて、ここにこの書を私の知れる又見知らざる読者の手に委ねる。

千九百二十三年晩春、東京にて

追伸

柳 宗悦

この書に納めたものの内、第一信と第二信の或る個所は今年の正月号「新潮」に所載。第三信の一部は三月号の「思想」に、第四信は四月号「文化生活」に、第五信の過半は「東京日々新聞」(翌期誌)に、第六信は四月号「白樺」に、第七信の大部分は五月号「婦人公論」に所載。ここにそれ等を一冊に編むに当って、凡てを増補訂正した。

無味な校正の凡ての労を湯浅宣子姉の厚き好意に負うた事を忘れる事は出来ない。又索引の編製は高橋文子姉の労によったのである。ここに深き感謝の心をお送りする。

SAMPLE
Shoshi-Shinsai.com

神に就て私の友に書き送れる書翰

第一信 神への懷疑に就て

私はこれから幾つかの書翰において、神に関する思想を書き列ね、それを貴方がたにお送りしようとするのです。いつも私の心から離れていない貴方がたに、この便りを書く折が来た事を嬉しく思います。私は貴方がたとは常に逢う事は出来ないのです。時と処とは私達を隔てます。ですけれど神の心づかいによって、いつも彼の御許においては逢う事が出来るのです。地における別れの寂しさを、神は彼の御膝において逢う悦びに更え給うのです。彼を離れるなら、私達は逢うべき場所を見失うでしょう。神は常によき仲立なのです。神においてのみ私達は温き挨拶と固き愛とを交わす事が出来るのです。私は今神を思う事によって、最も厚く貴方がたを想う悦びを受ける事が出来るのです。

しばしば神が見失われるのは、神が吾々に現われないからではなく、吾々が神を見失うからだと言い得るでしょう。何か私達に暗きものがある、心の眼を閉ざしているのです。神への理解を得ようとする者は、先ず自らの思想を浄めなければなりません。不浄な思想の中に神を迎える事は出来ないのです。私はこの便りにおいて、神の都を訪ねる為に如何なる出発が用意されねばならぬかを語ろうとするのです。出発を誤るならば、順礼の終りは永えに来ることがないでしょう。或る者はそれを見失うが故に、進んでは神そのものを否定しようとするのです。しかし私達はかくする前に、私達の踏んでいる道が、果して神の御許に導く正しい道であるかを吟味しなければならないのです。

私達は神に向つて様々な問いを掛けます。問う事に誰も躊躇を感じてはいないのです。しかし私達はかく問う前に、問いそれ自身が何を意味し、又問い方それ自身が正しいかを反省しなければならぬのです。直ちに神への疑いから出発すべきではなく、疑いに対する疑いから発足しなければならないのです。疑うとか思うとか云う事は如何なる性質を意味するのであるか。私はこの基礎的な問題から出立しようとするのです。即ち人々が呼んで認識論的領域と見做すものに入つてゆくのです。私はさきに神を見失わない為には、私達の思想を浄めねばならないと云いました。この浄めると云う事を学的に云うならば、認識論的な根本的発足を得ると云う事を意味するのです。

私はここに貴方がたへお送りする長き書翰を書き起そうと思います。

一

あの日向葵が光を慕つて、その短い一夏の一生を太陽に捧げているのと同じ様に、吾々もまた永遠なものを懂れて、人生の道を旅してゆきます。この短い変易の多い一生を越えて、何か不変な常住な世界に活きたい希願を懐きます。これは私達の氣ままな求めではないのです。何かこの小さな自我を越えた見知らぬ力があつて、私達にかく求めよと迫っています。日向葵になぜ日の光を慕うのかと尋ねたら、恐らく何事をも答えずに、只あの黄金の豊かな花卉を以て、憧るる日の方向を指し示すでしょう。私達は神を求めると云いますけれど、むしろ神が私達を呼んでいるのだと云う事が出来るでしょう。それは人の要求であるよりも、神からの喚求なのです。私達が生れる事によつて、神を求める心が生じたのではなく、神を求める為に私達が生れて来たのだと云う事が出来るでしょう。

永遠なものへの思慕、ここに宗教心の出発があると私は思うのです。有限なものに心を満たし得ない吾々の熱情、相對の絆を破り出ようとする自由への憧れ、凡ての変易を越えて不滅なものを捕えようとする吾々の希願。私達はかかる思慕の中に私達の一生を見出しているのです。私達は今有限の世に招かれてここに生れています。しかしこれは無限の世に憧がれるが為だとも云い得るでしょう。かつてプラトーンも考えた様に、神は吾々を神から離さず事によつて、神に帰る心を吾々に覺まさせています。凡ての者は神へ向う衝動に活きているのです。吾々はよし凡ての問題を忘れる事に成功しても、神の問題だけは忘れる事が許されていないのです。

「凡ての道はローマに集る」と云われました様に、凡ての思想や凡ての行為は神に向つて集められて来ると云い得るでしょう。しかもローマを見ない者は、世界を見ないのであると云い得た様に、神を解せずしては一切を解していないと、云い切る

事が出来るのです。なぜならそれは礎を置かずして家を建てるのと等しいからです。人は彼が持つ神への理解において、彼の凡ての思想が何ものであるかを懺悔するのです。

そもそも神とは如何なるものであるか。実に人類に反省の歴史が始まると共にこの問いは出発しました。そうして恐らく人間の歴史が続く限り、この問題は終る事なく提出せられるでしょう。私達は神に向って絶え間なく、かずかずの疑いを掛けて来ました。それは幾度か問われ幾度か考えられ、又幾度か答えられ幾度か争われました。そうして今後も又決定せられる日が来ると誰も保証する事は出来ないのです。その長い苦しみの歴史を省くと、もしや吾々は望むまじき答えを望んでいるのではないかとさえ思えるでしょう。問題は無窮であり至難であり、又累積し錯雑しているのです。それは絶望と抛棄と、進んでは否定をさえ吾々に促す様に見えるのです。しかしあらゆる難渋も、人類からその問題を抹殺せよと云う意味を伴いはいはしないのです。いわんや廻避せよと云う弱い声を伴いはいはしないのです。吾々には只生命が与えられているのではなく、考える生命が与えられているのです。もし神が考えに余る問題であるなら、何故に考えに余るかを考えなければならないのです。私達は神の前に私達の思想を殺す事は出来ないのです。至難であればある程私達はその問題に呼ばれているとも云い得るでしょう。神への思想において、吾々は最も深く試練の一生に入ります。人類は彼等の思索を進めるべき運命の許にあるのです。私のこれ等の書翰もまた、その窮りない神への思想史の一断面を占めるのです。

私がここに見ゆる有限の世界を越えて、見えない無限の世界があると是認する時、それが甚だ独断的な云い方であると誰でも思うでしょう。どうして相対な自然の彼岸に、究竟な神を承認するのであるか。それを承認する為には理由を持たなければならないと考えられます。誰しもそう思うのです。問わずしては知る事は出来ないのです。知る事なくしては是認する事が出来ないのです。神を許す前に、神への問いが起らなければならないのです。誰もこれが神へ近づく正当な道だと云う事を疑いません。人類が神に加えた種々な疑問を省みる時、それが常に三個の大きな形を以て現われているのを気附くでしょう。

第一は神の性質に関する問いなのです。神そのものを知りたいと云う願いなのです。この希いは神とは何であるかと云う問いを呼び起します。神とは何を意味するのであるか。神の本質は如何なるものであるか。何を指して神と呼ぶのであるか。私達は知りたいのです、神とはかくかくのものであり、又はかくかくのものであつてはならぬと云う事を。これ等は神に関して何人にも起る基本的な疑問なのです。

第二は神の有無に関する問いなのです。神の問題として古来から最も重要視せられた存在の問題がここに現われてきます。果して神は居るかどうか。如何にして吾々は神の存在を認許する事が出来るのであるか。神を信ぜべきか否かの方向はこれに